

中公文庫

ダーティキャッツ・イン・ザ・シティ

あざの耕平

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

本文挿画
仙田
聡

目次

ダーティキャッツ・イン・ザ・シティ

# 9	# 8	# 7	# 6	# 5	# 4	# 3	# 2	# 1	# 0
273	233	195	161	129	97	63	35	9	7

あとがき

314

ダ
ー
テ
イ
キ
ヤ
ツ
ツ
・
イ
ン
・
ザ
・
シ
テ
イ



#

0

夜に遊ぶ影があつた。

小さい影と、大きい影。

歪いびな生者と、無垢むくな死者。

片方が尋ね、片方が答える。

片方は笑い、片方は笑わない。

あちこち廻まわるが、どこにも行かず。

色々試すが、何も為なさず。

人目を避けて、夜に遊ぶ。

まるで野良猫みたいだね。

そうかもね、と白い影が言った。

1



男は床に寝ていた。

地下室だ。窓もない。しかし、月が出ているのはわかった。意識が戻るより先に、血がざわめいている。

男は低く唸って身動きした。

全身が錆び付いたようだった。結構な期間寝ていたらしい。手足を動かそうとするとギシギシと軋む。まあ、いつものことだ。構わずに上半身を起こし、板張りの床の上で胡座をかいた。男の外見は三十前後。引き締まった細面ながら、やる気のない陰気な双眸が印象を悪くしている。癖のある黒髪と薄く伸びる無精ひげ。シャツにスラックス姿だが、ネクタイはしていない。

地下室の照明は消えていた。男は節々を鳴らしながら身体を捻り、側に転がっていた煙草へ腕を伸ばした。パッケージの中に入れていたライターを取り出し、一本抜いて口にくわえた。火を付ける。

闇の中に一瞬、男の顔が浮かび上がる。同時に、男の瞳孔が縦長にすぼまった。仲間内で言う、いわゆる「猫目」。もともと、最近では彼らを指して化け猫呼ばわりする者も少なくなつた。小さな明かりはすぐに消え、深々とした吸気音のあと、闇の中に紫煙が立ち上つた。

眠りに就く前のことを思いだそうとした。しかし、頭はまるで働かなかつた。まあ、いいだろう。長いこと似たような時間を繰り返している。眠りに就いたのが一日前でも一年前でも大

差はない。男は胡座をかいたまま背中を丸め、深々と煙草を――

「あんたが、マダナイ？」
咽むせた。

咳き込みながら振り返ると、パッと地下に明かりが点とつた。光に反応して形を変える瞳を庇かばい、男は煙草を持つ右手をかざした。

声かしたのは一階に上がる階段の上からだつた。

壁際のスイッチに手を伸ばした姿勢で、勝ち気そうな面構つらがまえの子供が、こちらを見下ろしていた。小学生か、せいぜい中学生といったところだろう。サイズの大きいパーカーにクロップドパンツ。右肩にリュックを背負まっている。

男は眉まゆをひそめた。

意識して瞳の形を戻しながら、煙草を吸い、吐き出す。知らない顔だつた。子供――それも、「生きた」子供だ。

その子供がこちらに向かつて、もう一度問いかける。

「魔術師のマダナイ。違うの？」

「……違う」

「でも、ここにいて聞いていた」

「誰から」

「別に、誰だつていいだろ」

いや、良くはない。彼らにとって罅ねぐらの秘匿ひとくせい性は重要事項だ。

「……黒虎か？」

「へい……何それ？」

きよとんとされた。違うらしい。しかし、だとすると誰だ。この場所を知る者など限られる。それに結界けっかい。この子供はどうして、ここの結界を突破できたのか……。

駄目だ。頭が回らない。ただ、厄介事やっかいごとのにおいがする。

上階の気配を探ったが、他に侵入者がいる様子はなかった。男は頭を掻かき、くわえ煙草のまま床から立ち上がった。

長身だが瘦軀すうこだ。階段に向かうと子供がわずかに身を固くした。男は構わずに階段を上る。身構える子供の目の前を通過し、一階の廊下を進んだ。素通りされた子供がパチパチと瞬まばたきをされたあと、慌てて後に付いてきた。

「ね、ねえっ！」

「……………」

「なんだよっ。無視すんなよ！」

無視して、リビングへ。

生活感が溢あふれる——というより、一見廃墟はいきょの如く散らかったリビングだ。しかし、灰皿はいつも通りテーブルの上にあった。もう一度煙草を吸い、近づいて灰を落とした。

振り向かないまま、

「誰の使いだ？」

背中越しに子供の緊張が伝わってきた。「使いじゃない」と固い声が返る。

「自分で会いに来たんだ。魔術師マダナイに」

「魔術師……」

「なんだよ。違うのかよ」

「……その魔術師に、何の用だ」

「あんたがマダナイじゃないなら、あんたには関係ない」

「そいつはありがたいな」

男は灰皿に煙草を揉み消し、二本目に火を付けた。テーブルの上にあつたウイスキーボトルに手を伸ばす。空だ。舌打ちがもれた。それから、古い、頑丈だけが売りのソファアに、どかっと倒れるように座り込んだ。

どうも色々と誤解があるようだが、それを解いて追い払う前に、二つほど確かめておかねばならない。わざわざ生きた子供を寄越したのが誰で、そいつの狙いがなんなのかだ。いや、それとも厄介事を回避するなら、このまま徹頭徹尾無視して、しばらくの間疇を移すのが正解だろうか。案外そうかもしれない。

子供はじつと男を見つめていた。舐められて堪るかと思全身で主張している。男はソファアに身体を預けたまま、しばし無言で天井をにらんでいた。

が、やがて鼻と口から盛大に紫煙を吐く。

「……名前は？」

尋ねると、子供はむすつと顔をしかめた。

「聞きたいなら、あんたが先に名乗れよ」

「十二」

「……何が？」

「だから、十二」

「……え？ 名前？」

「通り名だ」

「……なんで数字なの？」

「名乗ったぞ」

「わかったよ。遠夜。遠い夜で、遠夜」

「本名か」

「付けてもらった」

「誰に」

「誰だっていいだろ」

「ここを聞いた相手からか」

「……………」

返答に詰まった。凶星らしい。男——十二は、次の煙草に火を付けながら、ちらりと遠夜の顔——首筋に視線を向けた。

遠夜はパーカーのフードは被っていないが、厚みが邪魔で傷跡の確認はできない。また、受け答えからして暗示で操られている風でもない。もともと、その手の手管を見抜く眼力は、十二にはなかった。『術』の類はからつきしなのだ。

テレビの横にあるデジタル表示の電波時計を確認した。四月二十日。必死に思い出す。確かに眠りに入る何日前に、雪が降っていたはずだ。とすると、おそらく二か月程度は寝ていたことになる。厄介事が起きるには十分な時間だろう。十二はジリジリと煙草の先を燃やす。

と、

「……猫」

突然遠夜がつぶやいた。

十二が顔を向けると、リビングに一匹の黒猫が入って来ていた。

首輪はない。しかし身綺麗みぎれいな、烏からすの濡れ羽色ぬいろをした艶つややかな漆黒しつこくの猫だ。こちらを見やる瞳

はアイスブルーだった。

十二がおもむろに口を開けかけた瞬間、

にゃあ、

と鳴き声を上げた。

「……にゃあ？」

十二は盛大に顔をしかめた。

「飼ってるの？」

「……は？」

「この猫」

「……ああ、まあ……」

「意外。あんたたちも、猫飼ったりするんだ」

遠夜はそうつぶやいたあと、「あつ」と十二に顔を向けた。

「犬。犬は飼ってないの？」

「……猫だけだ」

答えると、「そう……」と幾分沈んだ声を出した。それから気を取り直したように、猫の前にしゃがみ込む。黒猫は心得た様子で甘く鳴き、遠夜の側に寄って喉を鳴らした。遠夜が初めて嬉しげな顔を見せ、猫の背中を優しくなで始めた。

十二はいよいよ颯め面になる。急激に、嫌な予感が拡大していた。

「……おい。ひとつ確認するが、お前に名前を付けてここに寄越したのは、長髪の白髪頭じゃないだろうな」

否定してくれと胸中で祈ったが、十二が尋ねると遠夜は驚いて猫から顔を上げた。

「やつぱりっ。あんたもシヤミの知り合いなんだね」

案の定だ。しかも「三味」ときた。複数ある通り名の中からわざわざその名を名乗ったのだとすると、これはただの厄介事ではなく、極めつきの厄介事である可能性が高い。

一方、遠夜は十二がシヤミの知り合いとわかって、急に気を許したらしい。

「シヤミがいなくなっただ」

と立ち上がって訴えた。

「もう長いこと連絡が取れない」

「……別に珍しいことじゃないだろ。絵に描いたような鉄砲玉だ」

「じゃあ、あんたも心当たりはないの？」

「ない。そもそも、もう何年も会ってない」

ぞんざいに答えると、遠夜はうつむき、黙り込んだ。足下に蹲うずくまっていた黒猫が、遠夜を見上げて鳴き声を上げる。十二は苛々いらいらと紫煙をくゆらせた。

これが厄介事なのは確定的だが、どういう種類の厄介事なのか、いまひとつ見えてこない。「もう一度聞かず。ここには何をしに来た？」

「……いなくなる前……最後に会ったときに、シヤミから言われたんだ。自分に何かあったら、ここに来てマダナイを頼れって」

遠夜の話聞いて、十二はつい片方の眉を持ち上げた。軽く驚いたときの癖だ。あのシヤミが他人に対してそんな風に気を遣うなど、俄じわかには想像できない。

「お前、シヤミとはどういう関係だ？」

「……友達」

「友達？ あいつと？」

「いいよ、別に。信じなくても」

聞き返すと、遠夜は頑かたく々な声で答えた。十二は無言のまま目を細くして遠夜を眺めた。

シヤミが子供を「困う」とも思えない。何か他の狙いがあったのかもしれないが、いつものあいつを思い起こせば、ただの気まぐれという線が一番濃厚だろう。つまり、「友達」というのも、あながち外れてはいないのかもしれない。何しろ変わり者だ。

「……お前、あいつのこと、どこまで知ってる？」

「ど、どこまでって？」

そう聞き返す顔を見る限りでは、大したことは知らないらしい。もつとも、かんじん「肝心の「正体」は知っているのだらう。でなければ、十二に対しても、もつと反応が違うはずだ。

ともあれ、このままでは埒らちが明きそうにない。

十二は携帯を探してテーブルに視線を彷徨さまよわせる。シャミが消えたのが事実だとすれば、少なからぬ影響が出てはいるはずだ。

「……何かあったらマダナイを頼れ、か……」

携帯を発見。が、バッテリーが切れている。そして充電コードの方は、見つからなかった。

「お前、ひよつとして『死にたがり』か？」

「……死人にとやかく言われたくないね」

「違うない」

十二はテーブルに腕を伸ばし、煙草を灰皿に押しつけて揉み消した。ソファから立ち上がって部屋の隅に移動する。ハンガーにかかっていたコートに手を伸ばしたが、今日の日付を思い出してジャケットをつかみ直した。

遠夜がハッと腰を上げた。

「どこ行くの？」

「外」

「何しに？」

「酒飲みに」

遠夜は面食らった様子で、「いまから？」と呆あきれたように言った。

「シャミのことは？ てか、あんた、本当にマダナイじゃないの？」

「俺が魔法を使うように見えるか？」

ジャケットに袖を通す。その背中に向かって、「でもっ」と遠夜は引き下がらずに続けた。

「あんただって、吸血鬼なんだろう？」

やれやれ。

十二は肩越しに背後を見やった。

ニヤリと見せつけるように牙を剝くと、遠夜がさっと青ざめる。

「教えてやる、坊主。『そういうこと』は、面と向かって口にするな。エチケツトだ」

ポケットの中身を確認。財布がない。コートのポケットを探る。あった。ついでに、フォルディングナイフも見つけた。両方ジャケットのポケットに移す。

振り向くと、遠夜がじつと十二を見つめていた。なぜか呆れたような顔だった。

「あんた、ほんとに吸血鬼なの？」

「エチケツトはもう忘れたか」

「私、女だよ」

「……………」

猫が、にゃあ、と鳴いた。十二は黙ってリビングを出た。

+

いま現在、東京に何匹の吸血鬼が棲んでいるのか、十二は知らない。百匹以上はいるだろう

が、千匹はいないのではないかと、その程度の認識だ。東京の人口が千数百万人と考えれば、大した数ではないと思う。むしろ、ほんのわずかだろう。

それでも——あるいは、だからこそかもしれないが——少数の吸血鬼たちには、最低限のコミュニティが存在する。たとえば「狩り場」ごとのコミュニティだ。十二が使っている罫は、雑司ぞうしが谷やにある民家だった。そのため狩り場には池袋いけぶくろか新宿しんじゅく、特に池袋を選ぶことが多い。とはいえ、ここ最近はそもそも「狩り」をすることもなく、もっぱら酒ばかり飲み歩いているのだが。

「吸血鬼って酒飲むんだ」

「飲む奴はな」

「……ひよつとして、ご飯も食べるの？」

「食う奴はな」

適当な十二の返事に、遠夜は眉根を寄せた。そういう表情はいかにも子供っぽい。

「意味あるの？」

「一応『精』は取れるが……というか、お前そんなことも知らねえで、吸血鬼になろうとしてんのか？」

結局、遠夜は十二の外出に付いてきた。彼女にすれば唯一の手掛かりだ。マダナイに会うまでは側を離れないつもりらしい。はっきり言って邪魔だが、好きにさせた。

寝起きに一杯引っかけるのは、十二の数少ない楽しみのひとつだ。もつとも、今回は酒以上に情報が欲しい。十二は、西口のバー『金の目』に向かった。繁華街の片隅。雑居ビルの三階

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。